

# ハイスクールD×D 異世界人達の王IF

マスターM

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公、ルータム・フランディは強力な力を持つフランディ家当主の長男に生まれる。父、母、妹2人に義弟ヴァーリ6人で暮らしていた。しかし10歳の時にルータムとヴァーリ、妹達以外一族全員殺されてしまう。

ルータムを引き取ったのはサーゼクス、ヴァーリを引き取ったのはアザゼルだった。ルータムはリアスと出会い許嫁となる。

15歳になったルータムは異世界に眷属探しに行く。眷属が違うIFストーリーです。気晴らし作品です。

女王 ボア・ハンコック・ONEPIECE

戦車 呂布(恋)・恋姫†無双 シモン・グレンラガン

騎士 胡蝶しのぶ・鬼滅の刃 アルトリア・ペンドラゴン・F a t e

僧侶 キャロル・マールス・デインハイム・戦姫絶唱シンフォギア 馬神弾・バト

ルスピリッツ

兵士 孫悟空・ドラゴンボール ライ・コードギアス 反逆のルルーシュ L O S T

C O L O R S 殺せんせー・暗殺教室 リザードン・ポケモン ルシファー・モンス

ト エレン・イエーガー・進撃の巨人 門矢士・仮面ライダーディケイド ロイ・マス

タンク・鋼の錬金術師

# 目次

ルータム・フランディ誕生	1
義弟ヴァーリ	7
フリード・セルゼンとの出会い	12
壊れた日常	24
失墜の中の出会い	36
再会	42
巫女との出会い	50
黒と白の猫	61
旅立ち	75

## ルータム・フランディ誕生

### 冥界

ここ冥界では悪魔と堕天使が冥界の覇権を争っていた。そんな悪魔、堕天使領の境目にある一族が暮らしていた。その一族は『フランディ家』。元72柱大戦前から三大勢力に対して和平を求めていた。大戦後は冥界の平和に尽力したことから当時の当主は最上級悪魔となり、悪魔の民からは平和の象徴とも言われている。

そんなフランディ家は今慌ただしかった。

「もう直ぐかな？」

「早く生まれないかな☆楽しみだね☆」

今フランディ家当主の子が生まれようとしていた。そしてフランディ家以外の者達もその生まれを心待ちしていた。最初に声を出したのは四大魔王の一人、サーゼクス・ルシファーとセラフォル・レヴィアタンである。更にその近くに同じく四大魔王のア

ジユカ・ベルゼブブ、ファルビウム・アスモデウスもいた。

「ま、気長に待てばいいだろ」

サーゼクスとセラフォルーにそう言ったのは、墮天使総督のアザゼルだった

「そうですね。生まれてくる子に祝福を」

アザゼルに同意し祈りをささげたのは、御忍びで来ている天使長ミカエルである。

なぜ三大勢力のトップ達が集まっているのかと言うと・・・このフランディ家三大勢力の仲を取り持っているからだ。

『オギヤーオギヤー!!』

「生まれたよ☆」

「だな、見に行くか」

アザゼルの言葉に全員立ち上がり、生まれてきた赤ん坊を見る為部屋に入って行っ

た。

「おーい、無事に産ませたみたいだな、アラン」

「ああ、ミラが頑張ってくれた」

アラン・フランディ。現フランディ家当主  
ミラ・フランディ。アランの妻。

「ミラちゃん見せて見せて!!」

「フフフはい」

セラフオールが見せてほしいと言うとミラはタオルに巻かれている赤ん坊を見せた。

「可愛い！将来はイケメンになるね☆」

「すくすくと育ってほしいですね」

「それでこの子の力は？」

「今から見てもらおうよ。ハウ婆」

セラフオール、ミカエルは赤ん坊の成長を楽しみにし、アジュカは赤ん坊にどんな力があるのかアランに聞いた。アランはどんな力を持っているかが見えるハウ婆を呼んだ。



「はいはい。おおこの子はお主達の力を受け継いでおるぞ」

「するとこの子の力は・・・」

「うむ。右手に空間を司る力。これはミラ様の力じゃな。左手に時間を司る力。これはアラン様の力。この子はまさしくお二人の愛の結晶ともいえるの」

ハウ婆が赤ん坊を見てその力を言うと全員驚いた。

「マジかよ。2人の力を受け継いでいるなんて・・・下手したら最強の悪魔になるんじゃないか？サーゼクスよ」

「そうだね。魔王になれるかもしれないな」

「ねえねえ、名前は決めたの？」

アザゼルとサーゼクスが話していると、セラフオールが名前を聞いて来た

「時間と空間だから・・・ルータム。この子は『ルータム・フランデイ』だ!!」

「ルータム。いい名前だね」

「ああ、将来が楽しみだ」

こうして後に最上級悪魔、異世界人達の王、ルータム・フランデイが生まれた。

## 義弟ヴァーリ

ルータムが生まれ6年の歳月がたった。ルータムが生まれてから1年後に双子の妹が生まれた。姉の方はイン。妹の方はヨウと名付けられた。インには暗闇を操る力。ヨウには光を操る力をもっている（因みに2人共ブラコンになっている。原因はルータムが甘やかすからだ）

「はあーほーよーはー！」

ルータムは今トレーニングをしていた。自分が生まれ持った力に頼らず、武道を極めようと、様々な武術を習っていた。今しているのは剣の素振りだ。かれこれ2時間は振っていた。

「フー。今日はこれぐらいにするか」

ルータムはタオルで汗を拭き家に向かってランニングを始めた。

「はあはあはあ。ん？た、大変だ誰か倒れている！」

家にもう少しで着こうとしたところで、ダークカラーの強い銀髪のルータムと同じ歳の少年が倒れているのを発見した。

「急いで手当をしないと」

ルータムは少年をおんぶして全力で家に向かって走った。

「お母さん大変だ!!この子道で倒れていたんだ!!」

「大変！直ぐに手当をするわ」

ルータムとミラは少年の手当を始めた。

3日後

少年を家に連れて来て3日経ったが未だ少年は目を覚まさない。ルータムは付きつきりで少年の看病をしていた。

「うーん。ハハハは・・・」

「良かった目が覚めたんだね」

「え？君は誰？」

「僕はルータム、ルータム・フランディだよ。君は？」

「・・・ヴァーリ。ヴァーリ・ルシファー・・・」

少年に名前を問われ答えたルータムは少年の名前を聞いた。

「ルシファー？ってことはヴァーリはサーゼクス兄さんの子供なの？」

ヴァーリがルシファーと名乗ったことでサーゼクスの子供だとルータムは思った（因みに何故ルータムがサーゼクスの事を兄と呼んだか、その理由は簡単で時々遊んでくれるからだ。他にも四大魔王とミカエル、アザゼルも時々遊びに来る）

「僕は旧魔王孫なんだ。そのことで父から虐待されて捨てられたんだ・・・」

「だったらこれからは家で暮らさない？」

「え？」

「だから僕と家族になろうよ」

「でも君の家族は迷惑なんじゃ……」

「そんなことはないぞ」

「あ、お父さん!!」

ルーナムから家族にならないかと誘われたヴアーリだったが、ルーナムの家族に迷惑が掛かると思い拒否しようとしたが、アランに否定された。

「自分の子を捨てるなど親としてあるまじき行為だ。お前さえ良ければ家の息子にならないか？」

「……いいん、ですか？」

「ああ、ミラもインもヨウも大丈夫だと言っておったぞ」

「本、当に、ぼ、僕は貴方達の、家族になって、いいんですか……？」

「良いよ！これからは僕達は家族だ」

涙を流しながらヴァーリは問いかけ、ルータムは笑顔で答えた。

「これからお世話になります。義兄さん。義父さん」

ヴァーリは笑顔で頭を下げた。

## フリード・セルゼンとの出会い

ヴァーリが義弟となり3年の月日が流れた。3年前のあの日からヴァーリもルータムと共に修行を始めた。

「さて、今日もやるぞヴァーリ!!」

「今日こそ義兄さんに勝つ!! 『デイベイン・デイベイキング白龍皇の光翼』」

『俺も負けてばかりは嫌だかだな、今日こそ勝つぞヴァーリ!』

「ああ。やるぞアルビオン!」

ヴァーリはルータムと修行の日々を過ごしていたら、ロンギヌス神滅具である白龍皇の光翼が目覚めた。目覚めた当初は戸惑ったがルータムとアルビオンの言葉で落ち着きを取り戻し最強の白龍皇を目指して修行を始めた（因みにまだルータムには一度も勝っていない）



ヴァーリはルータムに接近して触れようとするが、ルータムは合気道でヴァーリを飛ばした。

「やっぱり簡単に触らしてくれないか義兄さんは・・・」

「当たり前だ。ソレで触られたら力が半減した上にお前に加算されるからな。まあ素手でやりあうのは危険だから・・・」

ルータムはそう言い右手で前に空間を作りそこに右手を入れ双剣を出してきた。

「今日は双剣で相手をしてやる」

「義兄さんの能力の方が神滅具より厄介だと思っるのは俺だけか？アルビオン・・・」

『俺も同じ考えだ。お前の兄は時間と空間を司る力をもっている上に戦闘のセンスがある。極めれば神に近い力を手に入れるだろ』

「その義兄さんを倒せば俺は最強の白龍皇になれる！俺は義兄さんをそして義父さん達を護る存在になりたいんだ!!」

ヴァーリは自分に激を入れルータムに仕掛けた。

「なら超えてみるヴァーリいいいい!!」

「うおおお!!」

2人の修行は日が暮れるまで続き家に帰るとミラのお説教が待っていた。

「お兄ちゃん遊ぼう!!」

夕食の後インとヨウにせがまれ一緒にヴァーリと遊ぶことになった。

「私大きくなったらお兄ちゃんと結婚する!!」

「インお姉ちゃんズルいよ！お兄ちゃんと結婚するのはヨウなんだから!!」

「私よ!」

「ヨウだよ!!」

インとヨウは姉妹喧嘩を始めてしまい、ヴァーリはその光景を微笑ましく見ていた。

翌日

「義兄さん今日は何をするつもり?」

「今日は魔法陣無しで人間界に行くぞ」

「どうやって行くつもりなの?」

「こうするんだ」

と言い右手を目の前に出し、自分達と同じ位の空間を作った。

「ここに時間を入れれば人間界に行けるかもしれない。後もつと力を付けければ異世界にだって行けるかもな」

「凄い流石義兄さん!!」キラキラ

ヴァーリは尊敬の眼差しをルータムに向けた。

「さて行くか」

「おおー」

2人はルータムが作った空間に入って行った。

人間界・イギリス

「着いたな」

「此処は？」

「今確認する」

ルーナムは魔法で今いる場所を調べた。

「此処はイギリスだな」

「義兄さん取り敢えず移動しない？ここは何もないし・・・」

2人が居る場所は木々が生い茂る森の近くだった。

「そうだな移動「ギャアアアア!!」アッチからだ行くぞ!!」

「ま、待ってよ義兄さん!」

ルータムは急いで悲鳴の聞こえは方に向かった。少し遅れてヴァーリも向かった。

「アハハハハ汚物の消毒完了!」

「これはお前がやったのか?」

ルータムが悲鳴が聞こえた場所に着くと、白髪のエクソシストと怪物・魔獣が横たわっていた。

「イエーッス俺っち、フリード・セルゼンがやりました。そう言うアンタは悪魔さんですね？悪魔は死ぬやあああ!!」

フリードは光の剣を出しルータムに斬りかかった。ルータムは避けず右手で光の剣を受け止めた。

「はああ!?!何で悪魔が光を触っても大丈夫なんだよ!!?」

「ああ。俺の右手は空間を司る。今この右手はその空間に覆われているから例え光でもダメージは受けない」

「なんつうチートだよ・・・」

「そら足元がお留守だぜ?」

ルータムは足払いでフリードを倒し太刀をフリードの前に付きつけた。

「・・・殺れよ」

フリードは死ぬと思いそう言ったがルーダムからは予想外な言葉を聞いた。

「お前強くなりたいか？」

「何？」

「だから強くなりたくないか聞いているんだ。強くなりたいたら俺が鍛えてやるよ」

「何故だ！俺はアンタを殺そうとしたんだ！それなのに何故そんなことが言えるんだ？」

「お前は性格は悪いが強い。その性格さえ直せば強くなると思ったから提案したんだ。どうする？」

「・・・いつかアンタを倒す。その為になら仕方ないがアンタに鍛えてもらおう」



「それは何時の話になるやら・・・俺の名はルータム。ルータム・フランデイだ」

「フランデイ!? 冥界の平和の象徴の一族ですかああああ!?!」

フリードは相手がフランデイ家の者だと分かり驚いた。

「知っているのか?」

「知っているも何もあの天使長が褒めていた一族ですよ!」

「ミカエル兄さんが言ってたのか?」

「ミカエル兄さん!?! アンタ天使長を知っているんですか!?!」

「知っているも何も時々遊びに来てくれるし、四大魔王と堕天使総督達と同じで弟の様に可愛がってもらってるよ?」

「はあああああああ!!!?」

天使長だけではなく、四大魔王、墮天使総督とも知り合いだと聞き更に驚いた。

「義兄さん!!」

「ん?来たかヴァーリ。フリード早速最初の特訓だヴァーリを倒せ。ヴァーリを倒せないとな俺は倒せないぞ」

「オーケー!ヴァーリくん俺つちが強くなるための生贄になつてね」

「ちよ義兄さん!これどういう事!?俺今来たところだから訳が分からないよ!!つて危ない!!」

ヴァーリはルータムに説明を聞こうとしたが、フリードが光の剣で襲って来て慌てて避けた。

「頑張れヴァーリ。それも修行だ」

「義兄さんの悪魔!!」

「おう俺は悪魔だアハハ」

ヴァーリとフリードの特訓は夜まで続いた。

## 壊れた日常

ルータムとヴァーリがフリードと出会い一年が過ぎた。今は三ヶ月に一度イギリスに行きフリードの特訓をしている。そして現に今も・・・

「Divide」

「かあああまたですか!! 本当に鬱陶しいですね! ヴァーリくん!!」

「それが白龍皇の力だからな。それに義兄さん相手には効かないし・・・」

「ルータムの旦那は規格外過ぎますよ・・・」

ルータムの名前が出て2人は同時にため息が出た。

「ヴァーリお兄ちゃん、ルータムお兄ちゃんの悪口は許さないよ!!」

「フリードさんもですよ？次ルータムお兄ちゃんの悪口を言ったら・・・」

「私達のOHANASIだよ？」

インとヨウはとびっきりの笑顔（だが目は笑っていない）でヴァーリとフリードの2人に言った。

「は、はいいいい!!」

2人は顔を蒼白になりながら返事をした。以前インとヨウのOHANASIをされ2人の心には一生心に残る傷が出来たのだ。何かは言わない本人たちの為に・・・

「おいそろそろ戻るぞ」

噂をすればルータムがやって来た

「はーい」

インとヨウはルータムの腕に抱き着き返事をした。

「フリード、次来的时候は俺とヴァーリを同時に相手してもらうからな」

「ちよっ！旦那それは流石に辛いですよ・・・」

「安心しろ殺しはしない。死ぬ数歩手前に行くだけだ」

「その前に旦那を・・・」

フリードの言葉は続かなかった何故なら・・・

「旦那を？」

「どうするつもりですか？フリードさん？」

フリードの首にインは暗闇の剣を、ヨウは光の剣（厚めの手袋を付けているので光の物を持つても大丈夫）をつけた。

「な、何でもございません・・・（旦那だけじゃなく、インとヨウの姉御も規格外だよな？何時の間にか俺たちの背後に立ってるし。さつきまで旦那の横にいたのに・・・）」

フリードは冷や汗を流しながらそう思った。

「さあ帰るぞ」

ルーナムはそう言い空間を作りヴァーリとインとヨウと入って冥界に戻った。

冥界に戻った4人は目の前で起きていることが信じられなかった。何故なら彼等フランダール族の町が燃えていたからだ。更には悲鳴も聞こえる。

「これは一体……」

ヴァーリが考えていると声がした。

「おいここに居たぞ！」

「当主のガキ達だ」

「殺せ！」

数人の悪魔がルータム達に襲い掛かって来た。しかしあっけなく4人にやられた。

「ヴァーリ俺が父さん達を探す。お前はインとヨウと共に隠れている」  
ルータムはそう言い屋敷に走っていった。

「義兄さん！」

「お兄ちゃん!!」

3人の声は虚しく響いた。

「とにかく隠れるぞ。義兄さんが戻ってくるまでは」

「うん」



ヴァーリ達は見つからないよう町から離れた。

一方ルータムは空間から剣と銃を取り出し、襲ってくる悪魔達を斬ったり撃ち抜いたりして、アラン達が居ると思うリビングに向かっていた。

「くそ！数が多い!!」

「死ぬええええ!!」

「デメエがな！」

ルータムは次々に襲い掛かってくる悪魔達を殺してやつとりビング前に着いた。

「父さん！母さん！」

「アラ？この息子ね、丁度今終わった所よ」

リビングに入ると眼鏡を掛けた女性が居てその両手には剣が握られていた。その剣の刃の部分には血が付いていて足元にはアランとミラが腹から血を出して倒れていた。

「父、さん・・・母、さん・・・お前がやったのか？」

「ええそうよ。この一族は私達にとって邪魔だからね。消えてもらうわ、貴方もね」

「許さない！貴様は俺がクロス!!」

ルータムは怒りで女性に突っ込んだ。

「面倒くさいわね後は貴方達に任せるわ」

と言い後ろに待機していた男たちに言い女性は何処かに転移していった。

「うおおおおおおお!!」

ルータムは獣の様な雄たけびをあげ男たちを次々に殺していった。

その頃ヴァーリ達も危機に陥っていた。

「フランデイの町が襲われているって聞いて来てみれば、面白い事になっているな」  
ヴァーリ達の前に現れたのは墮天使達だった。それも反アザゼルの墮天使が。

「くっ、こんな時に・・・」

「ん？白龍皇か。丁度いい、お前を捉えて我等の力として使ってやろう。後ろの女達は肉奴隷として使ってやるよ」

墮天使の男の言葉に3人は怒りを覚えた。

「ふざけるな！俺はお前達の力になるつもりはない！それとインとヨウにも手を出させない！！義兄さんの代わりに俺が2人を護るんだ！！」

「ヴァーリお兄ちゃん・・・私達も戦う！！」

ヴァーリは白龍皇の光翼を出し、インとヨウはそれぞれ暗闇と光の剣を構えた。

「無理はするなよ。カバー出来る範囲で動けいいな？」

「うん！！」

3人は襲い掛かってくる墮天使の攻撃に備えた。

一方ルータムは・・・

「ハアハア．．．ハア．．．」

敵の返り血と自身の血で服が赤く染まっていて呼吸が乱れていた。ルータムの周りには沢山の悪魔の死体が転がっていたその数はざっと見て30はある。

「な、何だこの化け物は?!」

「これだけの傷を負わしたのにまだ動くのか．．．」

悪魔達はルータムとの戦いで恐怖心が少し生まれていた。

「ええい怯むな奴は最早虫の息だ!一斉に掛れば奴は終わりだ!!」

指揮官らしき男の声でその場にいる悪魔達は一斉にルータムに襲い掛かった。ルータムは限界なのか動こうとしない。後少して剣でルータムを切り裂けると思った所で悪魔達は消滅した。

「間に合わなかったが、彼は助ける事が出来そうだ．．．」

「お、お前は!!サーゼクス・ルシファー!!何故お前がここにいる!!?」

そう悪魔達を消滅させたのは四大魔王の一人サーゼクス・ルシファーだ。サーゼクスはグレイフィアからフランディ家の町が襲われていると報告を受け急いで駆け付けたのだ。

「何故ここにいるか?それは君達を消滅させるためだ」

そう言い指揮官の男も消滅させた。

「グレイフィア、急いでルータム君の手当を!!」

「はい!」

サーゼクスはグレイフィアにルータムの手当を指示し自分の家に三人転移した。

その頃ヴァーリ達の方にはアザゼルがシエムハザから報告を受け助けに来ていて、ヴァーリとインとヨウを保護しグリゴリに連れて行った。

この日ルータム、ヴァーリ、イン、ヨウ以外のフランディ家の一族は皆死亡した。同

時にルータム達の日常が壊れた。

## 失墜の中の出会い

フランデイの町が壊滅した2日後ルータムはサーゼクスの屋敷に寝かされていた。

「ここは？グッツ!!」

ルータムは起き上がり辺りを見ようとしたが体中から痛みがして起き上がれなかった。

「目が覚めましたか」

「あ、グレイファイアさん。そうだ!!ヴァーリは？インとヨウは？それに他の一族の皆はどうなりましたか!!?」

「落ち着きたまえルータム君」

「サーゼクス兄さん・・・」



ルータムが興奮したままグレイファイアに問い詰めているとサーゼクスが入って来た。

「私が説明しよう。まずフランディの町が襲われたのは2日前だ」

「俺は2日も眠っていたのか・・・それでヴァーリ達は？」

「ヴァーリ君達3人はアザゼルが保護したよ。2日前に連絡が来て今はグリゴリにいるよ」

「良かったヴァーリ達は無事か・・・」

サーゼクスからヴァーリ達の安否を聞きルータムはホツとした。

「そして一族の皆だが・・・君達4人以外全員の死亡が確認された」

「え？サーゼクス兄さん冗談きついよ？嘘だよね？皆死んだって・・・」

「嘘ではない受け入れるんだルータム君。君達の一族は君達4人以外全員死んだんだ」

「あ、あああ、うわあああああ!!!」

サーゼクスの言葉を聞きルータムは耐え切れず涙を流した。

「グレイフィア、暫くルータム君を一人にしてあげよう。心の整理が必要だからね」

「・・・はい」

サーゼクスとグレイフィアは静かにルータムのいる部屋から出た。

数十分して落ち着いたルータムは痛む体に鞭打ち屋敷を出て近くの森を歩いていた。

（俺は守れなかった・・・父さんも母さんもハウ婆も一族の皆。何が次期当主だ、俺は誰も守れない無力な奴だ、いつそのこと楽になれば父さん達の所にいけるかな・・・）

ルータムはどんどんとマイナス思考になっていき、右手で空間を作りだしそこから銃

を出した。

(もう疲れた……)

ルーナムが銃を頭に当て引き金を引こうとした所に制止の声が聞こえた。

「ちよつと貴方何しているの!? 馬鹿な真似はよしなさい!!」

ルーナムが銃を頭に当てたまま振り返ると、サーゼクスと同じ紅髪の少女がいた。

「……お前には関係ないだろ? ほつといてくれ」

「嫌よ目の前で死のうとするヒトをほっておけないわ」

「俺はもう生きる意味がないんだ。結局何も守れなかった。俺には何も残ってない」

ルーナムは再び引き金を引こうとしたが、紅髪の少女に腕を引かれ銃を落としてしまった。

「貴方に起きた事はお兄様から聞いたわ。貴方何も残ってないですって? ちゃんとお兄

様の言葉を思い出しなさい!! 貴方に残されたものを!!」

「俺に残されたもの……」

紅髪の少女の言葉でサーゼクスの言葉を思い出した。『ヴァーリ君達3人はアザゼルが保護したよ』と言う言葉を。

「そうだまだヴァーリ、イン、ヨウは生きている。俺が死んだらあいつ等が悲しむ。ありがとうな。おかげで目が覚めた」

「そうならいいわ」

「そう言えばお前の名は?」

「あら、ヒトに名前を尋ねる時は自分からするものじゃなくって?」

「そうだな。俺はルータム。フランデイ家次期当主いや、フランデイ家当主のルータム・フランデイだ」

「私はグレモリー家次期当主のリアス・グレモリーよ。命の恩人の名前をしつかり憶えておきなさい」そう言い笑顔のリアスの顔をルータムは見惚れていた。

後に二人は婚約者となり冥界随一の夫婦となる事はこの時は知らなかった。

## 再会

リアスの言葉で自分を見つめなおしたルータムは早速ヴァーリ達に会いにアザゼルが居る墮天使領に向かおうとしていた。

「ルータムどうやって墮天使領に行くの？ここから墮天使領まで馬車を使っても何日もかかるわよ？」

「ああ、リアスは俺の力を知らなかったな」

「ルータムの力？それって私の滅びの力みたいな物？」

「ああ。俺の右手は空間を司る力。左手に時間を司る力があるんだ。それで空間を作り時間を入れれば移動が可能だ」

「なんだか凄いわね」

ルータムの力を聞きリアスは呆れた。

「ヴァーリ達の気配は覚えているから直ぐに行けるだろ。リアスお前も来るか？」

「いいの？」

「ああ、俺と一緒になら墮天使領に行っても問題はないだろうし」

「分かったわ、しっかりエスコートしてよね」

「はいはい、お姫様」

ルータムは自分達の前に自分達と同じ大きさの空間を作り時間を入れ、目的地であるグリゴリに向かって歩き始めた。

「ちよ、ちよつと下ろしなさいよ！」

「エスコートしろって言ったのはリアスだろ？」

空間に入る前にルータムはリアスをお姫様抱っこし、空間に入ったのだ。

「そ、それはそうだけど・・・」

「嫌だったか？」

「・・・嫌じゃない」

ルータムの言葉に頬を少し赤くそめそっぽを向きながらリアスは呟いた。またルータムもリアスをお姫様抱っこする時に頬を赤らめ、心臓がドツクン、ドツクンと高鳴っていた。

（またこの感じ・・・リアスの笑顔を見た時と同じだ。やっぱり俺はリアスの事を・・・）  
（男は皆同じだと思ってたけど、ルータムは何だか違う気がするわ・・・それにこの気持ち・・・）

2人共空間の移動中に自分の気持ちを考えていた。



墮天使領・グリゴリ

「ヴァーリ！イン、ヨウ！ついでにアザゼル居るか？」

「義兄さん!!」

「お兄ちゃん!!」

「俺はついでかよ!!ルータム！」

ルータムの言葉にヴァーリ達は出てきた。

「義兄さんもう大丈夫なの？」

「ああ、リアスのおかげで吹っ切れたよ。俺はフランデイ家当主として生きていく」

「もう大丈夫そうだね義兄さんは。所でリアスって誰？」

「ああこいつだ」

ルーナムが後ろに振り向きリアスはヴァーリ達の前に立ち自己紹介を始めた

「私はリアス・グレモリー。グレモリー家次期当主で、魔王サーゼクス・ルシファアの妹  
よ」

「俺はヴァーリだ。義兄さんの弟で今代の白龍皇だ」

「白龍皇ですって!! 悪魔なのにどうして神器を持っているの!？」

「俺は人間と悪魔のハーフだ。悪魔の方は旧ルシファアの血が流れている。だが俺はもうヴァーリ・ルシファーではなく、ヴァーリ・フランディだこの事は四大魔王も知って  
いる」

「そう。なら私がいう事はないわ」

リアスはヴァーリの言葉を聞き四大魔王が何も言わないのだったら自分も何も言わないと言った。

「妹のインです」

「同じく妹のヨウです」

「さ、帰るか。当分はリアスの家に世話になるけどな」

「当分と言わずずっといても良いわよ」

「それはリアスやサーゼクス兄さんの迷惑になる」

「いいえ。決して迷惑なんて私もお兄様もそれにお父様やお母様もそうは思っていないわ」

「……ありがとうな、リアス」

「……良いわよ別に」

ルーナムとリアスはまた顔を赤く染めた。

（ねえねえまさかお兄ちゃん……）

（多分ヨウの考えている通りだと思う……リアスさんの方もお兄ちゃんに気があるみたいだし）

ルーナムとリアスの様子を見てインとヨウは察した。

「義兄さん……俺ここに残るよ」

「どうしてだヴァーリ？」

「俺は今までのままじゃ強くなれない。もつと力を付けないと義兄さんを支えられない。だから俺はアザゼルの下で修行して今よりも強くなって義兄さんを越えてみせる

「よ」

「頑張れよヴァーリ。お前は俺の弟だその日を楽しみにしているぞ」

「うん!!」

「アザゼルいやアザゼル兄さん、ヴァーリの事頼んだぞ」

「おう、任せとけ俺がお前に勝てる様鍛えといてやるからな」

「それは楽しみだ。帰るぞ、リアス、イン、ヨウ」

「ええ」

「はーいーい」

ルータムは空間を作りリアスの家に帰った。ヴァーリは後にグリゴリの幹部となり冥界の平和を墮天使側から守る事になる。

## 巫女との出会い

「ルーナム人間界に行くわよ!!」

ヴァーリ達と再開し数日たったある日リアスが突然ルーナムの部屋に入って来て人間界に行くと言ってきた。

「突然どうした？何かあったのか？」

「実はこの前悪魔の駒（イーヴィル・ピース）をお兄様から頂いたのよ」

「それで眷属を集める為に人間界に？」

「そうよ」

「で、俺に足と護衛しろと？」

「そうよ」

「はいはい、仰せのままにお姫様」

といい頭を下げた。

ルータムとリアスはこの前の事からよく一緒にいる。

「何処に行くんだ？」

「そうね・・・今度私が管理する駒王町なら何処でもいいわ」

「分かった」

ルータムは右手を前に出し2人分入る空間を作り、左手で時間を入れ、座標を駒王町にセツトした。

「行くか」

「ええ」

そう言い2人は自然に手を握った。

### 駒王町

「さて着いたが何処に行く？」

「そうね・・・」

何処に行くか話していると近くの神社に結界が張られたのを感じた。

「これは結界か？あっちの神社からだな」

「キャアアアアア!!」

「!?急ぐわよルーナム」



「ああ!!」

結界が張られた神社の方を向くと悲鳴が聞こえて来て2人は急いだ。

「リアス捕まれ結界を通り抜けるぞ」

「分かったわ」

ルーダムは空間を作り結界を通り抜け神社に入っていた。そこで見た光景は大勢の男達が、女性とその子供と思われるルーダム達と同じ歳位の少女に向かって刀を構えていたところだった。

「その子供を渡せ!その穢れた血を受け継ぐ子供は始末する!!」

「嫌です。この子はあの人との大切な娘なのです!」

「ならば親子共々あの世に送ってやろう、死ね!!」

男は刀を振り下ろした。

「ギャア！」

刀を振り下ろした男の耳には悲鳴が聞こえてきた、聞こえて来た悲鳴は目の前にいる親子のものではなく、仲間の男の悲鳴だった。

「どうした！何があった!？」

「背中が斬られた・・・」

「何だと?」

他の仲間の言葉に斬られた男は答え、刀を振り下ろした男は親子と自分の刀を見た。親子には傷一つついてないのに刀は血に濡れていた。

「どうなっているんだよ!」

「知るか俺が聞きたいよ!」

あなりの現象に男たちは冷静さを失くしていった。

「大人数で女子供を襲うとは呆れる」

突然その場に第三者の声が響き渡った。

「だから消えろ」

その声を聴いたのを最後に男たちは死んだ。

「大丈夫か？」

ルータムは親子の前に現れ大丈夫か聞いた。

「はい。危ない所を助けて頂きありがとうございます。ほら朱乃もお礼を言って」

「ありがとう、私とお母様を助けてくれて」

「気にするな。もう出て来てもいいぞリアス」

「本当に一瞬で終わったわね何をしたの？」

「空間を通して斬っただけだ」

「やっぱり貴方の力は出鱈目ね」

「あの貴女は？」

リアスの登場に女性はリアスに聞いた。

「私はリアス・グレモリー。悪魔よ」

「じゃ彼も・・・」

「ああ、俺は・・・」

「お前！朱乃！無事か!!？」

ルーナムが自己紹介をしようとすると突然の大声で遮られた。

「アナタ！」

「お父様！」

「おお無事だったか。ん？おおルータム君じゃないか！」

「お久しぶりです。バラキエルさん」

仲良く会話する2人にリアスと朱乃と母親は固まった。

「ちよつとルータム！バラキエルつてまさか……」

「おう、墮天使幹部のバラキエルだ。昔アザゼル兄さんとよく俺の面倒を見て貰ったんだ」

「アナタまさかこの子が？」

「ああ、フランデイ家最後の希望のルータム君だ」

ルーナムはリアスに、バラキエルは朱璃に説明した。

「所でルーナム君は何故ここに？」

「リアスがサーゼクス兄さんから悪魔の駒を貰ったから、眷属を集める為にこの町に来たんだ。結界が張られたのと悲鳴が聞こえて慌ててここに来たんだ」

「そうか。ありがとう妻と娘を助けてくれて」

「気にしなくていいよ。見過ごせなかったから」

ルーナムがバラキエルと話している近くでリアスは朱乃に声を掛けた。

「ねえ貴女、私の眷属にならない？」

「私ですか？」

「ええ、貴女がいいわ」

リアスは朱乃を眷属に誘っている。ルーダムは見守り、バラキエルと朱璃は娘がどのような選択をしても受け入れようとした。

「私悪魔になる」

「朱乃本当にいいんだな？」

「はい。いまの私ではお母様は守れません。でも悪魔になつて強くなつてお母様もお父様も守つて見ます」

バラキエルの言葉に自分の意志を伝えた朱乃はリアスの方を向いた。

「私を貴女の眷属にして」

「ええ、貴女にはこれが良いわね」

リアスは女王（クイーン）の駒を出した。

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、姫島朱乃よ。いま我の下僕となるため

その魂を我に預け悪魔と成れ。汝、我が『女王』として、新たな生に歓喜せよ！」

朱乃の胸に『女王』の駒が入って行った。

「調子はどうかしら？」

「ええ良いわ」

そう言い悪魔と墮天使の羽を出した。

「これからよろしくね朱乃」

「ええ、よろしくリアス」

早速リアスに眷属が出来た。朱乃は後に『雷光の巫女』という二つ名を持つことになる。



## 黒と白の猫

姫島朱乃を『女王』として眷属に向かえ入れたリアスは今ある森にいた。何故ある森かと言うと・・・

「リアスの要望通り適当に移動したけど・・・」

「……何処なのでしょうか？」

「……」

そうリアスがルータムに適当に場所を設定させたため現在の位置が分からなくなってしまったのだ。ルータムと朱乃の言葉にリアスは目を逸らすだけだった。

「取り敢えず一度グレモリー家に戻るか」

「そ、そうね。それが良いわ」

「……」

ルータムがため息をつき空間を作ろうとした時、ガツサと音がして3人は身構えた。出てきたのは金髪のボロボロの少年だった。

「皆、ありが、とう……」

その一言を言つて限界なのか倒れてしまった。ルータム達は慌てて駆け寄り状態を見るがかなり危険な状態だった。するとリアスが……

「貴方名前は？」

「名前……ない」

リアスの呼びかけに目を開け少年は答えた。

「ならこれから、木場佑斗と名乗りなさい。そして私の眷属になりなさい。我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、木場佑斗よ。いま我の下僕となるためその魂を我に預け悪魔と成れ。汝、我が『騎士（ナイト）』として、新たな生に歓喜せよ！」

『騎士』の駒が佑斗の胸に入っていた。佑斗は疲れが出たのか眠ってしまった。

「眠ったか」

「そうみたいね。取り敢えずグレモリー家に戻りましょう。朱乃と佑斗をお兄様に紹介しないとイケないし」

「そうだね」

「リアスにはお兄様がいるの？」

「ええ、私の兄は四大魔王の一人よ」

「え！魔王様?!」

リアスから兄は魔王と聞き朱乃は驚いた。

その後グレモリー家に到着したルーラム達は佑斗をグレイファイアに預け、朱乃をサーゼクスに紹介すると、一人の小柄の少女が紹介された。何でもその子の姉が主を殺しは

ぐれ悪魔となり責任を妹にとらせようと処分されそうな時にサーゼクスに助けられたと、ルータム達に説明した。

「貴女名前は？」

「・・・白音。でもこの名前は嫌。姉様の妹って知られてしまう・・・」

「ならこれから塔城小猫と名乗りなさい。小猫私の眷属にならない？」

「・・・」コクッ

リアスに眷属にならないかと聞かれ小猫は頷いた。

「決まりね。我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、塔城小猫よ。いま我の下僕となるためその魂を我に預け悪魔と成れ。汝、我が『戦車（ルーク）』として、新たな生に歓喜せよ！」

『戦車』の駒が小猫の胸に入って行った。

「これで3人目。ルータムのおかげで順調に眷属が増えたわ。ありがとう」

「僕からもお礼を言うよルータム君。君がいなかったらリーアたん一人では心配だったからね」

「お兄様！リーアたんと言わないようあれ程言ったのに言わないで下さい!!」

リーアたんと言われ、リアスは顔を真っ赤にしてサーゼクスに抗議した

「いいじゃんリアス俺は可愛いと思うぞ？リーアたん」

「なっ!?!／／／」

ルータムまでリーアたん呼びされリアスは先程より顔が赤くなった。ルータムは表面上冷静だが内心ではドキドキしたままだった。

ピロピロピロピロ

突然ルータムの携帯がなりサーゼクスに許可を貰い電話の相手を見るとヴァーリだった。

「どうしたヴァーリ？何かあったのか？」

『あつたも何も大変なんだよ。SSランクのはぐれ悪魔が墮天使領に出て既に多くの犠牲者が出ているんだ。アザゼルに言ったら義兄さんに相談してみろって言うから電話してみたんだ……』

「あの馬鹿兄は……そんなだから部下に愛想つかされるんだろうが。ヴァーリその悪魔の名前は？」

『確か黒歌だったと思う』

「!!分かった直ぐに行く！俺が行くまで動くなよ！」

ルータムはヴァーリの返事を聞く前に電話を切った。

「どうしたの？電話の相手は誰なの？」

「ヴァーリからで何でも墮天使領にSSクラスのはぐれ悪魔が出て、どうしようもない

から俺に助けをもとめて電話して来たみたいなんだ」

「アザゼルは許可したのかい？」

「ヴァーリがアザゼルに言ったら俺に相談しろって言ってた」

サーゼクスがアザゼルの許可があるかルータムに聞いて来てそう返した。

「つとと言う訳で少し行ってくる」

そう言い直ぐ空間を作りヴァーリの元に行った。

「ヴァーリ!!」

「早や!?!義兄さん電話して10分も経って無いのにもう来たの!?!」

「まあな、それで黒歌は何処にいるんだ?」

「こつちだよ付いて来て」

「場所が分かるのか?」

「ああ、最初に遭遇した時に発信機を黒歌に取り付けたんだ」

「・・・その発信機何処にあったんだ?」

ルーナムは嫌な予感がしたが質問した。

「作った」



「は？作ったってどうやって？」

「アザゼルが発明品を作っているに手伝ってから、俺も発明品を作るようになっていた」  
ヴァーリの言葉を聞きルーダムは心の中で頭を抱えた。

（あの馬鹿兄・・・ヴァーリに余計な事をさすなよ!!ヴァーリが間違った方向に進んだら死刑だな!!）

その頃グリゴリ本部

ゾクッ

「ツ!？」

「どうしたアザゼル？急に立ち上がって？」

「あ、あ悪いシヤムハゼ。何だか急に悪寒がしたんだ」

アザゼルが悪寒を感じ立ち上がった事にシヤムハゼは疑問に感じアザゼルに問いかけた。

「もしかしたらルータム君の死刑宣言だったりして」

「おいおい、それは本当に洒落ならねえよ・・・」

そう言うアザゼルであったが、次にルータムに会った時に本当に一回死にかけて事をこの時は知らなかった。

場所は変わり墮天使領森林

「はあ、はあ・・・ここまで来れば大丈夫だにや」

黒歌は墮天使の追っ手を振り切り一息ついていた。

「これからどうしようかにや・・・」

「見つけた！」

「にやにや!!？」

これからどうするか考えていると空中から声がして上を見ると悪魔の羽で飛んでいるルーナムと、白龍皇の光翼で飛んでいるヴァーリの姿があった。

「このタイミングで白龍皇とか最悪だにや・・・」

黒歌は現白龍皇の登場で死を覚悟した

「俺達はお前を始末しに来たんじゃない、話がしたいだけだ」

「・・・本当にや？第一お前は誰にや？知らない相手と話すつもりはないにや」

ルーナムの言葉に微かに希望が見えたが知らない相手を信じれる程黒歌には余裕がなかった。

「話がしたいと言うのは本当だ。フランデイ家当主として誓う」

「フランデイ家!？」

ルーダムがフランデイ家の者だと分かると黒歌はルーダムを信じようと思った。

「それで私と何を話したいのかにや？」

「主人殺しの真相だ。お前は力に溺れる様な者ではなさそうだからな、何か事情があったんじゃないか？ 本当の事を話してくれ、そうすればお前の味方になれる」

「分かったにや、全て話すにや」

黒歌はルーダムに全て話した。主を殺したのは妹の白音を守るためだったこと、その主は黒歌達の仙術に目をつけ最悪黒歌達を使い潰そうとしたことなど、包み隠さず話した。

「・・・大変だったな。よく頑張ったよ黒歌は、もう我慢しなくっていい」

黒歌の話を聞き終わりルーダムは黒歌を抱き寄せ頭を撫ぜた。

「う、うわああああん!!辛かった、苦しかったにや!!」

「もう大丈夫だ。俺がサーゼクス兄さんに言つて黒歌のはぐれを取り消してもらえようにするよ。それで妹とも仲直りすればいいさ」

「ありがとう、ありがとうにや・・・」

「どういたしまして」

ルータムは黒歌が落ち着くまで頭を撫ぜた。黒歌が落ち着いてからヴァーリも連れ3人でグレモリー家に戻り、サーゼクス達にも説明し黒歌のはぐれが取り消された。また真実を知った小猫も黒歌と仲直りした。

黒歌はルータムに恩を返すと言つてきて、ルータムはヴァーリの補佐をしてほしいと頼んだ。これに黒歌は・・・

「任せるにや!ご主人様の命とあれば深夜のご奉仕までするにや!!」

「ちよつと黒歌!最後の言葉は聞き捨てならないわ!!」

「そうですわ！」

黒歌の言葉にリアスと朱乃が反応し、そのまま3人の乱戦となった。

余談であるが黒歌がヴァーリーの補佐に着いたことにより、アザゼルがヴァーリーに余計な事を教えるたびにルータムにシバかれる様になったとか・・・

## 旅立ち

あれから五年の月日が流れた。ルーダムは日々修行の時を過ごしていた。11歳の頃にリアスの親友のソーナ・シトリーと出会い同じ歳に森で修行していたサイラオーグ・バアルと出会う。

出会い頭にサイラオーグから手合わせを申し込まれルーダムは能力を使わず純粹に自身の力で戦った。結果はルーダムの勝利で終わったがサイラオーグは再戦を申し込んで来て翌日また戦う事になった。その日から一ヶ月はサイラオーグとの手合わせをしいつの間にか意気投合していた。そして何時かレーティングゲームでお互い全力で当たろうと約束した。

13歳の時にディオドラ・アスタロトと出会い彼のしてきた事に対して怒りボコボコにした。その時心を入れ替えるなら兄であるアジユカ・ベルゼブブに報告しないとと言うとその場で土下座しルーダムに許しを請うた。

14歳の時にはシーグヴァイラ・アガレスと出会う。その時偶々買って来たガンダムのプラモを目撃させ、目を輝かせながらガンダムについて語らされた。後日暴走したことを謝りにルーダムを尋ねた。その時にリアスとも出会う。

そして15歳・・・

「ルータム君これを」

サーゼクスはルータムに白銀の悪魔の駒（イーヴィル・ピース）を渡した

「遂にこの時が来たな・・・」

そう今日ルータムは異世界に行き眷属を集める旅に出るのである。見送りに四大魔王とグレイフィア、リアスとその眷属、ソーナ、サイラオーグ、シーグヴァイラ、黒歌と妹であるインとヨウ義弟ヴァーリと大勢のヒトが集まった。

「お兄ちゃん!!」

インとヨウに関してはルータムに抱き着いて離れようとしなない。

「イン、ヨウ俺は大丈夫だ。3年以内に必ず帰ってくる。だから待つて欲しい。約束だ」そう言いルータムは左手の小指を2人に向けると2人も小指を絡ませ指きりをした。



「ヴァーリ俺が留守の間リアスを頼む」

ルーナムとリアスは半年前から許嫁となった。出会った時からお互いに気があつたが中々言い出せずにいたが半年前にルーナムがリアスに異世界に行き眷属を集めると言つた後に告白した「リアス。俺はお前の事が好きだ！だから異世界から帰ってきたら結婚を前提に付き合つてほしい!!」と言いリアスの返事は勿論OK。

「任せて義兄さん。義姉さんは俺が守つて見せるよ」

ヴァーリは胸を張つて答えた。

「黒歌ヴァーリを頼んだ（アザゼル兄さんが余計な事を教えていたらメモしといてくれ）ヒソヒソ」

「任せるにや！（分かつたニヤ。しっかり監視しておくニヤ）ヒソヒソ」

黒歌にヴァーリの事（アザゼルによる間違つた方の監視）を任せた

「・・・ルーナム」

「リアス大丈夫だ必ず帰ってくる。俺を信じてくれ」

「そうね貴方なら大丈夫ね。でもこれを」

リアスが取り出したのは紅色のネックレスだった。

「私とお揃いよ」

リアスの首には白銀のネックレスがかかっておりパールックだと分かった。

「ありがとうリアス。これは俺の宝物にするよ」

ルータムもネックレスをかけた。

「そろそろ行くよ。皆3年程待ってて」

「ルータム!!」

ルータムが空間を作り入ろうとしたらリアスに呼び止められて振り向くとキスされた。

「いってらっしやいのキスよ。私のファーストキスなんだからしっかり責任とってもらわよ？帰ってきたら貴方からお帰りのキスをしてね」

「ああ、必ず帰って来てお帰りのキスをしてやるよ」

「そう言いルータムは空間に入っていた。」

「行ったか・・・」

「大丈夫だよサーゼクスちゃん。ルーちゃんなら立派な眷属を連れて帰ってくるよ☆」

「お姉様と同じです」

「一同は思った事を言いルータムが立派になり帰ってくると信じていた。」

「お前誰だ？」

空間に入り彷徨っていると、目の前に幼女が現れた、ゴスロリのような服で前が全開で胸の所はテープの様な物で×に張っていた。

「我オーフィス、無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）」

「あの龍神かよ・・・俺はルータム。ルータム・フランディだ。俺に用か？」

「我、グレートレッド倒したい。ルータムの力貸して欲しい」

「グレートレッドつて確か、真なる赤龍神帝（アポカリユプス・ドラゴン）だったよな？  
何故グレートレッドを倒したいんだ？」

「我、静寂が欲しい。グレートレッド、倒して静かに眠る」

「勿体ないな」

「??」

「オーフィスこの世界には楽しい事が沢山あるんだ。眠ってばかりじゃ勿体ないだろ  
？」

「？我分らない」

「なら俺と一緒に行動するか？俺は今から異世界に行き眷属を集めるんだ。その旅で前に教えてやるよ、楽しい事や面白いもの、美味しいもの、どうだ？」

「うん、我ルータムについて行く」

「よし、これからよろしくな！」

「うんよろしく」

ルータムはオーフィスと握手して異世界に向かった。